開明都市函館の遺産「重要文化財」（その２）

中尾　仁彦　箱館歴史散歩の会主宰
第1回 函館検定 上級試験合格

昨年「中空土偶」が北海道第1号の国宝に指定され、私たちは函館の文化財に対して認識を新たにしました。歴史上、芸術上、学術上価値の高いものを総称して有形文化財といいます。そのうち重要なものを「重要文化財」と呼び、さらに世界文化の見地から特に優れたものが「国宝」となります。開明都市函館に「重要文化財」は7件あります。その歴史を3回に分けてご紹介します。

３．旧函館区公会堂

昭和49年、重要文化財に指定された「旧函館区公会堂」は、明治後期の函館の文化を今日に伝えている洋風建築の代表作です。明治40年の大火で町会所や商業会議所が焼失したため、明治４３年に函館区（現函館市）は、集会所、商業会議所、ホテル（実際は使用されず）を包括した建物として建築します。建築総費用は什器備品込みで推定7万３千円、現在の約１６億円に相当し、自身も大火で住宅・店舗を焼失にもかかわらず、費用の大部分の5万円を寄付した豪商・初代相馬哲平の協力がなければ建築は不可能でした。

函館区の土木課の二人の役人は、大規模な洋館を外国人の指導を一切受けず設計・監督を成し遂げ、幕末・明治から近代都市として発展を重ねた函館人のレベルの高さを証明しました。高龍寺で実績のあった村木甚三郎が建築を請け負いました。木造2階建ての洋風館は、アメリカの植民地時代に公共事業に用いられたイギリスのコロニアル・スタイルで左右対称形です。函館は相次ぐ大火を経験したため、火に強いレンガ造りの土台で、正面にはバルコニーと三角の破風飾、屋根窓さらに3ヵ所の玄関があります。これらを木造の円柱が支え、柱頭に装飾が施されたコリント方式です。

内装は古代ギリシャやローマで多く使用されたアカンサスをあしらった装飾で、貴賓室と応接室の壁、天井とも壁紙はイギリス製、カーテンは西陣織、シャンデリアはフランス製、マントルピースのタイルはイタリア製、また廊下のリノリュームも輸入品と内外の最高級品をふんだんに使用しております。細部には和風建築も加味され、明治４４年、皇太子（後の大正天皇）が貴賓室に宿泊された際には、トイレ、風呂場が増築されました。品質の高い家具類は、函館の職人が短期間で作ったそうです。

多くの区民が楽しんだビリヤード室や地元の名士がダンスパーテイなどで交流した柱が一本もない大広間（１３０坪）は、社交場としてハイカラな函館の歴史を刻みました。バルコニーから見る港と坂は絶景で、夜間照明に浮かぶ姿は気品に満ち溢れ、函館のシンボルとして多くの観光客が訪れております。

４．函館ハリストス正教会復活聖堂

函館ハリストス正教会復活聖堂は、安政６年（１859年）に初代ロシア領事館の付属聖堂として建立された日本のハリストス正教会の発祥の地です。明治５年、函館領事館は東京に公使館が開設されたため廃止となり、教会は正式に独立します。

初代司祭は病気のためすぐに帰国。文久元年（１861年）に来函の2代目司祭ニコライは、聖歌を歌う正式な礼拝を日本最初に始め、また明治元年にキリスト教弾圧下に３人の日本人を密かに洗礼します。アメリカに脱出の新島襄や榎本軍の脱走兵・五島軒の五島英吉も匿い援助しました。明治5年に東京ニコライ堂に転任するまでの8年間、住民と親しむため、国語、日本の歴史を熱心に勉強、倒産した古本屋を丸ごと購入したほどです。

初代聖堂は明治４０年の大火で焼失、大正５年、敷地２１００坪に再建された現在の聖堂は、基礎は石積み、壁体は赤煉瓦3枚に漆喰施工、また緑色の銅版屋根は科学的に熟成されています。大きなドーム型の屋根はロシア風ビザンチン様式で、屋根には数多くの十字架が設置され、５のクーポル（冠状構造）は、４人の弟子が真ん中のキリストを囲んでいることを意味します。内部は円天井で、聖障（イコノスタス）のイコン（聖像）はロシアからのもの、また明治１０年代にイコンを学びにロシアに渡った山下りんの「十二大祭図」があります。大十字架は火事の際に持ち出しに成功した初代聖堂のものです。聖堂の２代目の鐘は、大正１２年の関東震災で壊れた東京ニコライ堂に移され現存、３代目はその音色から「ガンガン寺」と市民に呼ばれ、また現在の5代目は「日本の音風景１００選」に認定されました。
聖堂は昭和58年に重要文化財の指定を受けました。

最終回の次号は「遺愛学院本館・旧宣教師館」、「北海道志海苔中世遺構出土銭」と「大谷派本願寺函館別院」をご紹介します。